

第四章 夢とうつつ

夢とは、睡眠時に生じる、ある程度の一貫性をもった幻覚体験であり、多くの場合では、視覚像で現れたが、聴覚・触覚を伴うこともあり、それに夢は非現実的な内容である場合が多いが、夢を見ている当人には切迫した現実性を帯びていると考えられている¹。

夢に対して、うつつとは、目がさめている状態であり、現実のものである。

われわれは、夢から覚めると、うつつに戻る。うつつに戻れば、夜になるとまた夢の世界に入る。夢とうつつは一つのサイクルのように見える。ここにおいて、この両者は対照しながらも、互いに繋がっていることが認められよう。

さて、古代の男女は、現代の男女と同様に、気になる人のうわさを聞いたら、あの人と逢いたくなるのであった。しかし、自分の都合で相手に逢うことできない場合もあり、相手の都合で逢ってくれない場合もあった。このとき、王朝の男女はどのような気持ちを持っていたのであろうか。逢えないときは、この恋しい思いはどこに託されるのであろうか。「うつつ」で逢えないから、せめて「夢」で逢いたいと思っていたのであろう。『古今集』恋歌には「夢」という用語が多く見られる理由はここにあるのであろう²。さらに、「夢」と「うつつ」との対照を通して、作者の心境が読み取れることも多い。したがって、本章では、「夢とうつつ」との対照的關係を通して、『古今集』の恋歌の表現を見てみたい。

さて、第三章で述べたように、『古今集』の恋歌において、時間的な対照表現に関わる歌は、四十六首あり、『古今集』恋歌の13%という比例を占めている。四十六首のなか、「夢とうつつ」という対照關係が認められる歌は、二十四首あげられる³。このことから、「夢とうつつ」という対照的關係は恋歌を分析する際に重要な要素といえよう。

¹ この解釈は新村、同前掲注4書による。

² 「夢」という用語は、「夢路」を含めて、『古今集』恋部の五巻において26例ある。

³ この二十四首の歌番号は、五一五、五一六、五二四、五二五、五二六、五二七、五五二、五五三、五五四、五五八、五六九、五七四、五七五、六〇八、六〇九、六四四、六四五、六四六、六四七、六五六、六五七、六五八、七六六、七六七である。

本章はこの二十四首から、次の五首を取り上げて検討してみたい。それは、この五首には「夢とうつつ」との対照表現が明白に読み取れたからである。では、この五首の原文を挙げておく。

- ① いとせめて 恋しき時は むばたまの 夜の衣を 返してぞ着る
(古今・恋二・五五四、小野小町)
- ② 涙川 枕流るる うき寝には 夢もさだかに 見えずぞありける
(古今・恋一・五二七、読人知らず)
- ③ 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらん 夢と知りせば さめざらましを
(古今・恋二・五五二、小野小町)
- ④ 夢路には 足も休めず 通へども 現に一目 見し如はあらず
(古今・恋三・六五八、小野小町)
- ⑤ 恋ふれども 逢ふ夜のなきは 忘れ草 夢路にさへや 生ひしげるらむ
(古今・恋五・七六六、読人知らず)

この章において、この五首の歌を通して、「夢とうつつ」という対照表現を検討してみたい。

ところが、『古今集』恋歌における「夢」と「うつつ」に関する歌には、表一のような主題がある。

表一

恋一	515	夢で逢いたい
	516	夢で逢いたい
	524	夢でさえ逢えない
	525	夢で逢いたい
	526	夢で逢えた
	527	夢でさえ逢えない
恋二	552	夢で逢えた
	553	夢で逢えた
	554	夢で逢いたい
	558	夢で逢えた
	569	夢で逢えた
	574	夢で逢えた
	575	夢で逢えた
	608	夢で逢えた
	609	夢で逢えた
恋三	644	うつつで逢えた
	645	うつつで逢えた
	646	うつつで逢えた
	647	うつつで逢えた
	656	うつつで逢えた
	657	うつつで逢えた
	658	うつつで逢えた
恋五	766	夢でも逢えなくなった
	767	夢でも逢えなくなった

(太字は本論で検討した歌を示す)

これらの主題は、むろん恋人達の逢いたい、逢えない、逢えた、逢えなくなったなどの情緒を、夢とうつつを通して示している。

歌の配列においては、「夢で逢いたい」→「夢でさえ逢えない」→「夢で逢えた」→「うつつで逢えた」→「夢でも逢えなくなった」という恋愛の進行過程も示唆されていよう。本章ではこのような恋愛の進行過程に基づき、「夢とうつつ」という主題に関わる歌を考察してみたい。

第一節 夢で逢いたい

「夢」は儚いものであるが、夢で恋しい人と逢いたい人もいる。歌から「夢で逢いたい」というメッセージを伝えてくるのは、何事であろうか。本節ではこの問題を考えてみたい。

表一で示されているように、「夢で逢いたい」という主題の歌は、『古今集』の恋一にも恋二にも認められるが、ここでは恋二の五五四の歌を挙げてみる。

① いとせめて 恋しき時は むばたまの 夜の衣を 返してぞ着る

(古今・恋二・五五四、小野小町)

胸がしめつけられるように、あの人のことが恋しくて切ない時は、私は夜の衣を裏返しに着て寝るのです。せめて夢の中でお逢いしたいと願って。

以下は先行研究を踏まえながら、歌の解釈をしてみたい。

まずは、「いとせめて 恋しき時は」という二句を見てみよう。「恋しき時は」とは言うまでもなく「恋しい時には」という意であろう。

「いとせめて」については、竹岡正夫氏は「〈せめて〉はもと〈狭し〉〈迫る〉と同根の語〈せむ〉から生じた語で対象に接近し迫っていく意から、ここは、ぐっと胸に迫って、といった意味に用いられている」⁴と指摘した。片桐洋一氏は「〈せめて〉は〈迫ってくるように〉の意、何かが迫ってくるほどに恋しい時」⁵と述べている。松田武夫氏は「〈せめて〉は、動詞〈迫む〉の連用形に、接続助詞〈て〉がついてできた副詞、胸がつまりそうに、大層痛切に」⁶と説いている。窪田空穂氏は「いとせめて」について「最迫りての意で、切なくというに当る」⁷としている。窪田氏のいう「最迫りて」とはすなわち「胸に迫って」という意である。

⁴ 竹岡、同前掲注 35 書、p 1183。

⁵ 片桐、同前掲注 24 書、p 426。

⁶ 松田、同前掲注 33 書、p 144。

⁷ 窪田、同前掲注 27 書、p 106。

以上の四氏の指摘をふまえて、ここでは「いとせめて」とは胸に迫っているという意と理解してよからう。

つづいて、「うばたまの」についてだが、「うばたまの」は枕詞であり、本来は「黒」に続く枕詞であつたらしいが、「黒髪」、「夜」、「宵」などに続く例もある⁸。この歌において、「うばたまの」は、第四句の「夜の衣」の「夜」にかかる枕詞だと見られる。

さて、第四、第五句にある「夜の衣を返してぞ着る」についてだが、「衣返し」という俗信が注目されよう。久保田淳「歌語、歌枕事典」によれば、「夜着を裏返して着て寝ると、思う人を夢に見る」⁹という。すなわち、衣を返して寝るのは、思う相手を夢の中へ呼び寄せるためであり、この動作自体は呪術的な意義を持っていると想定できるのである。この俗信に関わるのは、「衣返し」だけではなく、「袖返し」や「衣手を折り返し」などの用語もある。

「ころもで」（衣手、衣袖）については、『時代別国語大辞典上代編』では次のように解釈している¹⁰。

袖、着物の手に当たる部分。衣手。恋愛の感情を表現するために用いられることが多く、濡れた袖を干すのは、妹に逢うことであり、袖を折り返すことは、自分の心を相手に通じさせる呪術であつた。これらの現れ方は、ソデにおいても一致している。（下線は筆者によるものである）

すなわち、「袖」と「衣手」とは同義に用いられており、「袖返し」も「衣手を折り返し」も、思う相手を夢の中へ呼び寄せる呪術とされていることが分かる。

ところが、このような俗信は『古今集』からではなく、『万葉集』には既に見られる。たとえば、

⁸ 「うばたまの」に関する解釈は、片桐氏の同前掲注 34 書（p 80）を参考したものである。

⁹ 久保田淳「歌語、歌枕事典」（『國文學解釈と教材の研究—歌・歌ことば・歌枕』第 34 卷 13 号、学燈社、1989）。

¹⁰ 上代語辞典編修委員会『時代別国語大辞典上代編』（三省堂、2002） p 315。

吾妹子に 恋ひてすべ無み 白たへの 袖返ししは 夢に見えきや
(万葉・卷十一・二八一二、作者未詳)

吾が背子が 袖返す夜の 夢ならし まことも君に 逢ひたるごとし
(万葉・卷十一・二八一三、作者未詳)

白たへの 袖折り返し 恋ふればか 妹が姿の 夢にし見ゆる
(万葉・卷十二・二九三七、作者未詳)

などの歌には、「袖（折り）返し」という用語が認められる。「袖返す」とは、夢を見る為の呪術である¹¹。また、「白栲の 我が衣手を 折り返し ひとりし寝れば ぬばたまの 黒髪敷きて 人の寝る」（万葉・卷十三・三二七四の一部）や「妻の命も 明けくれば 門に寄り立ち 衣手を 折り返しつつ 夕されば 床打ち払ひ」（万葉・卷十七・三九六二の一部）などの『万葉集』の歌には「衣手を折り返し」と記されている。このように、「袖（折り）返し」「衣手を折り返し」といった俗信は、『万葉集』時代から既に認められよう。

五五四の歌に戻るが、小町の歌は「袖返し」ではなく、「衣を返して」であるが、「返し」という用語が認められる。すなわち、この歌も前述した民間信仰の神秘的な呪いによりかかりつつ恋の回復を希求した歌だと理解できよう¹²。

「夜の衣を 返してぞ着る」との二句について竹岡正夫氏は次のように指摘している¹³。

作者も、これがたわいもない俗信であることは百も承知のことであるが、それでも苦しい時の神だのみ、あるいは藁をもつかむといった気持ちで、せめてそうなりともして、つきあげ胸にこみ

¹¹ 森本治吉「万葉人の世界観—デーモンと夢について」（『國文學解釈と教材の研究—特集万葉集の生活の探求』第9巻4号、学燈社、1964）。

¹² 石原昭平「小野小町—恋多き女」（『國文學解釈と教材の研究—特集古代文学にみる人間像』第52巻11号、学燈社、1987）。

¹³ 竹岡、同前掲注35書、p1183。

上げてくる恋の切なさを慰め晴らそうとするのである。（傍点は筆者によるものである。以下同）

つまり、この歌で詠まれた夢についての俗信は「苦しい時の神だのみ」であり、「恋の切なさを慰め晴らそうとする」ために詠みこまれたのである。

また、田中常正氏は「俗信に信頼を置くほど俗信を信じ、恋人に夢でも逢いたいという願いを強くこめていることを示している」¹⁴と述べた。田中氏は作者が俗信を信じることを指摘し、それを歌に読み込まれたのは、「夢で逢いたいという強い願い」と解釈したのである。

つまり、この歌で「衣を返して着る」という俗信から、作者小町の夢で逢いたいという希望の強さが見られる。また、恋しい人と逢いたくても、逢えないとき、俗信を信じるしかない、という女性の弱い立場も見られよう。

さて、「衣を返して着る」という俗信は『古今集』のほかの恋歌にも詠み込まれている。五一五の歌である。

唐衣 ひもゆふぐれに なる時は 返す返すぞ 人は恋しき
(古今・恋一・五一五、読人知らず)

発句の「唐衣」とは第四句の「返す返すぞ」の縁語である¹⁵。また、「返す返すぞ」一句は、「衣を裏返す」という意と、「繰り返す」「何度も何度も」の意の「かへすかへす」を同時に掛けているとされる¹⁶。つまり、この「返す返す」ということは、作者が「ひ（日）もゆふぐれ（夕暮れ）に なる時は」とあるように、「夕暮れ」の時にやったことで、五五四の歌にある「夜の衣を返してぞ着る」と同様に、思う人を夢に見るために衣を裏返して着る、という俗信に関わっているものと想定できよう。

¹⁴ 田中、同前掲注 39 書、p 103。

¹⁵ 窪田、同前掲注 27 書、p 62。

松田、同前掲注 33 書、p 83。

¹⁶ 片桐、同前掲注 24 書、p 358。

五五四の歌に戻るが、まとめてみると、この歌の歌意は胸に迫って恋い慕われる時は、夜の衣を裏返し着てみて、夢で逢いたいということである。

ほかに、松田氏はこの歌については、「小町の歌は、恋愛の悶々の情から解放されるための当時の習俗に取材したもので、撰者時代の観念的発想の恋歌と比較すれば、生活そのものが歌われており、実感を伴った、一時代前の歌風ということができよう」¹⁷と指摘した。つまり、この歌の歌風は撰者時代の恋歌と違い、実感があるものと認められる。

また、小沢正夫氏は小野小町の三首の夢の歌について考察したことがある¹⁸が、そのなか、五五二からの一連の夢の歌は、縁語、掛詞を巧みに使われた他の歌とは、対照的な詠法である、と氏が指摘した¹⁹。

なお、田中氏は「〈夜の衣を返してぞ着る〉という表現は何の飾りもなく、行われる習慣の実体をそのまま直写している。何の意図した表現の構成もなく読む人の頭に素直に入っていく。こうした点に小町の夢の歌の構成の特徴がある」²⁰と考えている。

このように、小沢氏も田中氏も、小町の夢の歌における自然な表現、つまり意図した表現の構成と飾りが無いという点に注目している。

ところが、筆者はここにおいて、歌に用いられた対照表現に留意したい。

歌の中では「夢」という言葉が用いられていないが、「夜の衣を返してぞ着る」二句によって、作者が「夢」に対する心情が語られている。つまり、「衣を返して」という俗信を通して、「夢」での逢瀬への期待という作者の気持ちが表わされているのである。

一方、「いとせめて 恋しき時は」という語句から「うつつ」の強く恋しい心情が分かる。

この歌は「夢」のことを詠んでいるだけでなく、作者が「うつつ」に対する心情も詠まれている。ここにおいて、「うつつ」と「夢」という対照表現が指

¹⁷ 松田、同前掲注 33 書、p 145。

¹⁸ 小沢正夫「夢みる謎の女」(『短歌』第 36 卷 13 号、角川書店、1989)。

¹⁹ 小沢、同上掲注論文。

²⁰ 田中常正『万葉集より古今集へ第 2—六歌仙・編纂者の恋歌の構成』(笠間書院、1989) p 527。

摘されよう。さらに、「夢とうつつ」という対照表現を通して、「うつつ」での激しく恋しい気持ちが強調されていよう。なぜなら、「うつつ」で衣を返して着るのは、「夢」で逢いたいためであるに違いない。だが、「夢」で逢いたいという願いの根本的な原因は、やはり「うつつ」で逢いたいためである。

小町はこの歌では直接に「うつつで逢いたい」という気持ちを語るのではなく、「夢とうつつ」という対照表現を通して、「うつつ」での激しく恋しい気持ちを「夢」に託して婉曲に表わした。こういう表現は作者の意図した表現ではないかもしれないが、この歌では対照表現の働きが重要であることが認められよう。

また、「うつつ」で衣を返して着ることを通して「夢」で逢いたいという表現の発想は、前述した五一五の歌にも類似している。

五一五の歌は「ひもゆふぐれに なる時は」との二句を通して、「夕暮れ」という時間性を提示した。つまり、「返す返すぞ 人は恋しき」とは夕暮れになるという時間点であった。ところで、なぜかこの時は特に衣を返して着ようとするのであろうか。それは昼間には逢えなかったからであるにほかならない。ここにおいて、「返す返すぞ 人は恋しき」との二句によって伝えられている相手への絶えぬ強い恋しさは、五五四の歌における「いとせめて 恋しき時は」との二句によって伝えられている胸に迫って恋しさとは、類似していよう。さらに、作者は「うつつと夢」との対照関係を通し、うつつでの切なさ、夢への期待を示しているという点においても、二首の歌が共通していると認められよう。

上掲した歌は「夢で相手に逢いたい」という心情を描写するものである。

だが、何故夢で逢いたいのか。その根本的な原因は現実には逢えないからではないか。また、古代の人々、特に落ちた人々にとっては、夢は不思議な力を持っているものである。上記した歌の考察を通し、恋愛中の男女は相手のことを思い、「うつつ」で逢えなくても、せめて「夢」で逢いたいという気持ちが伺われよう。

ここにおいて、「うつつ」と「夢」との対照によって、「逢いたい」という気持ちが一層強く語り出されていることが認められるのである。

次は、「夢でさえ逢えない」という主題に入りたい。

第二節 夢でさえ逢えない

恋人同士には夢で逢いたい、夢で逢えない時もある。そのとき、恋人達はいかなる心情でいたのであろうか。このような心情について、下記の歌を通して考察してみたい。

② 涙川 枕流るる うき寝には 夢もさだかに 見えずぞありける

(古今・恋一・五二七、読人知らず)

流れる涙は川になるとして枕まで流されるが、そんな川の上で悲しみながら寝たのでは、夢だっではっきりとは見られないことだ。

さて、この歌の発句は「涙川」とあるが、「涙川」とは涙の流れることを「川」にたとえたものとされる²¹。『古語大辞典』によれば、この用語は「恋の悲しみに関する表現が多い」²²という。また、この用語について、松田武夫氏は「涙が多量に流れ落ちるさまを、川に見立てたもの、平安時代に、新造された歌語」²³と指摘し、片桐洋一氏も「万葉集にはない古今集の歌語である」²⁴と述べている。ほかに、ツベナタ・クリステワ氏は次のように説いている²⁵。

〈涙の玉〉や〈涙の川〉のいずれの例も平安時代にあたり、万葉集ではそのような表現が使用されていない。(中略)古今集における「涙川」の歌は八首も(「涙の川」の二首を含めて)あり、〈袖の涙〉の他のどの表現よりも登場率が高いことは、「涙川」

²¹ 「涙川」に関する解釈は、片桐氏の同前掲注 34 書 (p 318) を参考したものである。

²² 中村幸彦等編『古語大辞典第四巻』(角川書店、1994) p 840。

²³ 松田、同前掲注 33 書、p 101。

²⁴ 片桐、同前掲注 24 書、p 377。

²⁵ ツベタナ・クリステワ『涙の詩学』(名古屋大学出版会、2001) p 17。

が歌語として成立し、歌人の注目をあびたことを証明している。

このように、クリステワ氏は「涙川」は歌語として成立したのは『古今集』以降のことだと見ている。この点は松田説に共通している。さらに、クリステワ氏は『古今集』における「涙川」の歌は八首あると指摘したが、この八首について筆者が調べた処、その中の七首は恋部に属するものである（属していない一首は物名の歌である）²⁶。

見てきたものをまとめれば、「涙川」という言葉は『万葉集』にも認められるが、歌語として用いられていなかったこと、また『古今集』においてはこの用語は特に恋部に取り入れられ、「恋」を語る歌語として詠まれていたことなどが分かるであろう。

つづいて、「枕流るる」という句を見てみよう。

まず「枕」についてだが、『古語大辞典』には次のような解釈が見られる。

枕は寝ること、および異性と共寝することを象徴することも多く、浮枕、楫枕、仮枕、旅枕、新枕などの熟語が作られ、「まくらをかはす」、「枕辺去る」、「枕さびし」など、情交・閨房に関する多くの表現を生じた。また、横たわってしかばねとなることより「城を枕」「同じ枕」など、死、特に討死にを表わす表現も生じた²⁷。

この解釈によれば、「枕」は「共寝」を象徴することが多いことが分かる。ところが、五二七の歌における「枕」は「共寝」を象徴する意味がない。なぜなら、第三句の「うき寝には」とあるように、作者は「憂き寝」をして、「独り寝」のことが想定できるからである。つまり、この歌では「枕」という一語は「独り寝」の寂しさと憂さを導き出す働きをしていると考えられるのである。

²⁶ この八首は『古今集』物名の一首（四六六）と恋歌の七首（五一一、五二七、五二九、五三一、五七三、六一七、六一八）である。

²⁷ 中村等編、同前掲注 124 書、p 385。

さて、「枕」という用語に関連するものとして「枕浮く」という用語が挙げられるが、寝ていて涙をたくさん流すことを形容するという意として用いられている²⁸。五二七の歌には直接に「枕浮く」という用語が記されていないが、「枕流るる うき寝には」との二句には、「枕」と「うき」との二語が提示されており、「枕浮く」の意が暗示されていよう。また、歌の構造から見れば、「枕流るる」は次ぎの「うき」を導き出した役割を果たしていると思われる。

さて、「ながるる」については、竹岡、片桐、クリステワ三氏は、ともに「ながるる」は「流るる」と「泣かるる」とを掛けると指摘した²⁹。つまり、「枕流るる」とは、枕が涙川に流れる意なのである³⁰。また、前句には涙川があるので、「ながるる」は「泣かるる」を掛けることは自然であろう。ゆえに、ここにおける「ながるる」は「流るる」と「泣かるる」とを同時に掛けていると思われる。

つづいて、「うき寝には」という句の「うき寝」については、片桐氏の『歌枕歌ことば辞典増訂版』³¹では、「憂き寝」はつらい独り寝を意味して詠まれているが、鴨などの水鳥が水に浮んだまま寝る「浮き寝」と掛けていうことが多かったと指摘している。氏の指摘を踏まえれば、この歌における「涙川 枕流るる うき寝には」とは、私が浮んだまま寝る（浮き寝）という意味と、私の涙が川のように流れて私が悲しくて憂き寝をしているという意とを同時に持っているとしてよかろう。

さて、『古今集』恋部には「涙川」と「うき」との関連を示している歌がほかに見られる。

篝火に あらぬわが身の なぞもかく 涙の川に 浮きて燃ゆらむ

²⁸ 中田祝夫等編『古語大辞典コンパクト版』（小学館、1983）p 1513。

²⁹ 竹岡、同前掲注 35 書、p 1145。

片桐、同前掲注 24 書、p 376。

ツベタナ・クリステワ、同前掲注 127 書、p 95。

³⁰ 窪田、同前掲注 27 書、p 76。

松田、同前掲注 33 書、p 101。

竹岡、同前掲注 35 書、p 1145。

片桐、同前掲注 24 書、p 376。

ツベタナ・クリステワ、同前掲注 127 書、p 95。

³¹ 「うき寝」に関する解釈は、片桐氏の同前掲注 34 書（p 68）を参考したものである。

片桐洋一氏によれば、この歌の「浮き」もまた「憂き」を掛けているという³²。この歌において、篝火が川に浮いて燃えているという景から、憂いて燃えている私の情緒が描かれているのである。

ここにおいて、五二九の歌の作者は「篝火が涙の川に浮きて」ということに託して、わが身の「憂きて」燃えている心情を伝えようとしたことが分かる。すなわち、作者は「涙川」という用語を通し、「うき」という言葉を引き出し、「浮き」と「憂き」という二種の情緒を述べているのである。このような表現は、五二七の歌における「涙川 枕流るる うき寝には」とは同じ手法のものだと見られよう。

つづいて、五二七の歌に戻るが、第四句と第五句を見てみよう。

原文は「夢もさだかに見えずぞありける」とあるが、この句は、夢さえもはっきり見られないという意である³³。この歌には、「夢」と「さだかに」を一首に同時に用いたのだが、このような用法は六四七の歌にも見られる。

むばたまの 闇のうつつは さだかなる 夢にいくらも まさらざりけり
(古今・恋三・六四七、読人知らず)

この歌では、「闇のうつつ」（暗闇の中での現実）と「さだかなる夢」（はっきり見た夢）とは対照的に記されているように見られる。歌の最後に「まさらざりけり」とあるように、「さだかなる夢」は闇のうつつに勝っているものと語られている。ここにおいて、恋に落ちた人にとっては、「夢」の「さだかなる」ことは、非常に重要なものだと考えられよう。そうすると、五二七の歌の「夢もさだかに見えずぞありける」とあるように、夢さえもはっきりと見られない状況はどんなに作者を悲しませたものだろうかと思像できよう。

³² 片桐、同前掲注 24 書、p 380。

³³ 窪田、同前掲注 27 書、p 76。

松田、同前掲注 33 書、p 101。

竹岡、同前掲注 35 書、p 1145。

片桐、同前掲注 24 書、p 376。

述べてきたものをまとめれば、この歌はすなわち、「涙が川となり、枕が浮いて流れるほどに泣き続けるような憂き寝においては、夢さえもはっきりと見られない」³⁴という歌だと認められよう。

さて、小町谷氏によれば、この歌は「恋する相手を思慕して泣きながら寝ているので、安眠できず、夢の逢瀬も叶わない」³⁵という心情を述べている歌である。また、クリステワ氏は次のように述べている³⁶。

ここで「涙川」と「夢」との対比は何を意味しているのだろうか。両者とも恋の表現であり、しかも〈逢いたい〉という思慕を表していることから判断すれば、「涙川」のために「夢」も“見られなかった”ということは、その詩的力の“力比べ”としても捉えられると考えられる。

「〈涙川〉と〈夢〉との対比」という氏の指摘は示唆的である。

氏の指摘を踏まえて、この歌をさらに深く考えれば、「涙川 枕流るる うき寝には」とは、涙が流れて悲しんでいる「うつつ」での心情を示していることが考えられよう。これに対して、「夢もさだかに 見えずぞありける」とは「夢」さえ見られないという夢の状況を表すと見られる。ここにおいて、「うつつ」と「夢」とは対照的な関係が認められよう。

また、「夢もさだかに 見えずぞありける」とあるように、「も」や「ぞ」などの用語が用いられた。これらの用語は作者が「うつつ」で相手に逢えないが、せめて「夢」で逢いたいという強烈な希求を示している。なぜこうして「夢」で逢いたいのか。それは「うつつ」で逢えないからである。相手をいくら思っても逢えないため、涙が流れて川になったのであろう。

さらに、「うつつ」で悲しすぎたため、夜になって寝ても相手の夢も見られない。この歌は一見して、「夢」が見えない、「夢」の逢瀬が叶えないことに

³⁴ 歌意は片桐氏の同前掲注 24 書 (p 376) の通釈によるものである。

³⁵ 小町谷照彦、同前掲注 7 書、p 117。

³⁶ ツベタナ・クリステワ、同前掲注 127 書、p 95。

よって、悲しんでいるという情緒を詠む歌であるように見えるが、「うつつ」の悲しみはあまりにも激しいため、夜になっても安眠ができなく、夢さえ見ることができないということも示唆されていよう。この上、作者が強調したいのは、「夢で逢えない」悲しみよりも、「うつつで逢えない」悲しみなのではないかと考えられる。

また、本節で「夢でさえ逢えない」を主題とする。この歌では「夢」が見られないけれども、「うつつと夢」との対照関係はやはり成立している。というのは、「夢」という時間帯で逢えなくても、こういう逢えない悲しみは、「うつつ」の情緒と対照できるからである。

ゆえに、作者は「夢とうつつ」という対照表現を通して、「うつつ」である人への恋しさ、「うつつ」で逢えない悲しさ、独り寝の寂しさなどの情緒を、読者に語っていると見られよう。

本節は「夢で逢えない」という主題を中心として、歌における「夢とうつつ」という対照表現を探った。

「うつつ」で逢えなかったら、せめて「夢」でも逢いたい。しかし、もし「夢」でさえ逢えなかったら、「うつつ」は一層辛くなるであろう。「夢」という時間帯で逢えない悲しみは、「うつつ」の情緒と対照できる。このように、「うつつ」と「夢」との対照表現を通し、恋の辛さが一層鮮明に描き出されたことがわかる。

では、「夢で逢えた」というテーマに関わる歌はどうか。次はこのテーマを見てみたい。

第三節 夢で逢えた

夢で恋しい人と逢えた。逢いたい人と逢えたという夢は、『古今集』時代の人にとっては、どんな意味があるのであろうか。次は『古今集』の歌を通して考えてみたい。ここでは、この主題の典型的な歌、五五二の歌から歌の検討をはじめたい。

③ 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらん 夢と知りせば さめざらましを
(古今・恋二・五五二、小野小町)

あの人のことを何度も思いながら寝たので、あの人が夢に現れたのだろうか。もし、それが夢と知っていたならば、私は目を覚まさなかつたらうに。

以下は先行研究による歌の解釈を踏まえながら、歌の解釈をしてみたいと思う。

まずは、「思ひつつ」という句を見てみたい。『万葉集』には、

思ひつつ 寝ればかもとな ぬばたまの 一夜もおちず 夢にし見ゆる
(万葉・卷十五・三七三八、中臣宅守)

という歌がある。片桐氏は小町の歌が三七三八の歌を換骨奪胎したものではないかと指摘した³⁷。確かに、小町の歌の発想も表現も、この歌と似ている。

また、「思ひつつ」の「つつ」は継続の意である³⁸。

「寝ればや人の見えつらん」という句の「寝ればや」は、疑問の形で原因、理由を推察している。「らん」は見えた原因を推量し、それを思い寝であると判断している³⁹。

「夢と知りせばさめざらましを」という句に、窪田氏は「を」について、感嘆で残念な事をしたいという餘情を持ったものと指摘した⁴⁰。

先行研究を踏まえて、歌を解釈してみる。「思ひつつ」とは「うつつ」である人を繰り返し思っていることである。そして、「寝ればや」とあるように、あの人を思いながら寝たら、「夢」に入り、あの人と逢えたのであろう。しかし、覚めたらすぐ「うつつ」に戻ってしまった。先のことは「夢」だと知った

³⁷ 片桐、同前掲注 24 書、p 421。

³⁸ 窪田、同前掲注 27 書、p 104。

³⁹ 田中喜美春、同前掲注 90 論文。

⁴⁰ 窪田、同前掲注 27 書、p 104。

ら、目を覚めることもないのであろう。この歌において、主人公が「うつつ」に戻りたくない、「夢」にいたいという気持ちが伝わってきたのである。

ところで、なぜ作者が「うつつ」に戻りたくない、「夢」にいたいのか。田中喜美春氏は次のように考えている。

俗信によれば、夢に現れるのは、相手が恋しているからだというが、今の場合は、そうではなく、昨夜、思い寝に寝てしまった自分の思いで夢を見たのだと、つらくも、相手の薄情を確認する。
(中略) 現実と夢の俗信とから相手の薄情を思い知らねばならぬ女の苦衷と、それでも諦めきれぬ心情が夢の残映の中に歌われている⁴¹。

ここにおいて、田中氏は、相手が自分のことを思っていない、相手の薄情に注目している。松田氏の「相手は、自分を愛してくれるではなく」と指摘し、意見は田中氏と一致している⁴²。

このように、「思ひつつ寝ればや人の見えつらん」という句は、相手が自分のことを思っているのではなく、自分が相手のことを思いつつ、夢に入っており、夢で相手を見たのかという意を示しており、作者はこの二句によって、「うつつの世界には、あの人が思ってくれない」ことを婉曲に物語っているのである。

「うつつ」の世界が残酷であるため、作者は目覚めることを後悔し、ずっと夢の世界にいたいわけである。作者にとっては、「夢」の中では、「うつつ」の残酷さを忘れることができるかもしれない。あの人も逢えたかもしれない。「うつつ」の世界で辛く生きている作者はむしろ夢の世界で幸福な味を味わうことができたのである。しかし、この夢の世界は幸せな境地であろう。作者はずっと夢にいたいのは、夢の世界が幸せなもののためなのであろうか。恐らく、作者にとってはそうではないのであろう。なぜなら、「夢は自らの主体的な思

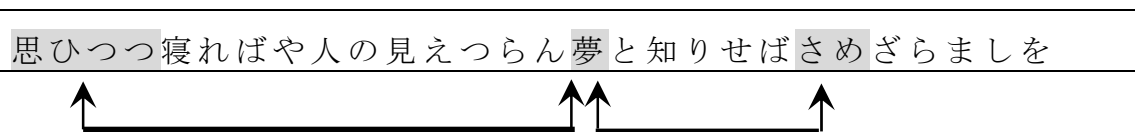
⁴¹ 田中、同前掲注 90 論文。

⁴² 松田、同前掲注 33 書、p 142。

いの投影にほかならない」⁴³ため、ここでは「夢での幸福感」を伝えるよりも、「うつつの世界での作者の思い、相手に逢いたい思い」を伝えることだと捉えるべきだからである。

また、小林世津子氏は小町の心情について、「日頃逢えない想い人に、たとえ夢の中ではあっても逢えたという事実が、小町には嬉しいことであつたのだろう」⁴⁴と指摘したように、小町が「嬉しい」と見ている。この点は「相手の薄情、女の苦衷」という田中氏の意見とは異なっている。しかし、上の参考を通して、小町の気持ちは、小林氏の指摘した「(逢えたという事実によって)嬉しい」というのではなく、むしろ切ないと捉えたほうが妥当であろう。つまり、この歌全体として「はかない」「切ない」というイメージが漂っているのである。

そして、「夢」という用語を通して、この歌は次のような構造を持つことが分かるであろう。



この歌に、「うつつ」と「夢」という対照表現は見事に主人公の悔しさ、空しさ、儚さを表現した。作者は明白に「うつつ」の切なさを言っていないが、「うつつ」と「夢」との対照を通して、「うつつ」の心情を描きあげた。このことから、「うつつ」と「夢」という対照表現はこの歌の世界を作り上げた際には重要な存在であり、この歌を考察する場合は、十分に理解し、把握しなければならないものだと言えるのであろう。

さて、小町のこの歌に類似して、「うつつ」と「夢」との対照表現も歌に用いられた恋歌として六〇八の躬恒の歌を取り上げることができる。

⁴³ 小嶋菜温子「恋歌とジェンダー—業平・小町・遍照」(『國文學解釈と教材の研究—恋歌—古典世界の』第41巻12号、学燈社、1996)。

⁴⁴ 小林世津子「小野小町—恋歌の中の小町—」(『昭和学院国語国文第18号』、昭和学院短期大学国語国文学会、1985)。

君をにのみ 思ひ寝に寝し 夢なれば 我が心から 見つるなりけり
(古今・恋二・六〇八、躬恒)

この歌の「思ひ寝に寝し」という発想は、小町の「思ひつつ 寝ればや」に類似している。「思ひ寝」とは、「人を恋しく思いながら寝ること」⁴⁵である。また、片桐洋一氏によれば、「思い寝の夢は、うたた寝の夢のように相手の思いがこちらに届いた結果として見た夢ではなく、自分が思っているゆえに見た夢に過ぎない」⁴⁶という。つまり、躬恒のこの歌における「夢」は、小町の五五二歌の「夢」と同様に、相手が自分のことを思っているのではなく、自分が相手のことを思いつつ、見た夢なのである。

また、この歌の「君をにのみ 思ひ」という言葉は、「うつつ」での思念を説明した。「思ひ寝に寝し 夢なれば」との二句は、「夢」の状態を表わした。それに、「我が心から 見つるなりけり」との二句は、自分の「うつつ」の意志で、「夢」で相手を見たという意を表すので、片恋を嘆くものとして捉える。

このように、躬恒のこの歌にも、小町の歌と同様に、「夢とうつつ」との対照表現が使用されていることが認められよう。さらに、この歌では、「夢」で相手を見たことが述べられていることを通して、「うつつ」ではあの人か思ってくれないという悲しい心情が描き出されているのである。要するに、「夢とうつつ」との対照表現によって、作者の片思いの辛さが伝えられているのである。この点もまた小町の歌と同じである。これらのことから、躬恒のこの歌は小町の歌との類似性が高いことが指摘できよう。

本節では「夢で逢えた」という主題を中心として、「夢とうつつ」という対照表現を探究した。

夢で逢いたいから、恋しい人に夢で逢えると、嬉しいはずであろう。でも、「夢とうつつ」という対照表現を通して、作者が強調したいのは、嬉しい情緒ではなかつろう。「夢で逢えた」というのは、自分の思いで夢であの人と逢え

⁴⁵ 大野晋等編『岩波古語辞典補訂版』（岩波書店、2004）p 258。

⁴⁶ 片桐、同前掲注 24 書、p 526

たことと、相手が思ってくれるので、夢で逢えたことに分けられているが、本節で検討した二首の歌はともに前者に属するものである。すなわち、この二首はともに、「夢」で二人が逢えたが、「うつつ」ではあの人が思ってくれないという現況を示す歌なのである。ここにおいて、作者は「うつつ」と「夢」という対照表現を用いて、主人公の悔しさ、空しさ、儂さなどの情緒を表現したのである。このことから、歌の中では、「夢」と「うつつ」とは単なる時間点を提示する意義だけではなく、歌の雰囲気を作り出すという重要な働きも有していると認められよう。

第四節 うつつで逢った

さて、やっとうつつで恋しい人に逢えたが、逢えたことによって幸せになるのであろうか。あるいは一層辛くなるのであろうか。次は六五八の歌を通して、この問題を見てみたい。

④ 夢路には 足も休めず 通へども 現に一目 見し如はあらず

(古今・恋三・六五八、小野小町)

夢の中では足の疲れも厭わずにせっせと通いつづけましたが、しかし、現実にひと目だけでもお逢いしたようなわけにはいきませんでした。

では、発句から見てみよう。

「夢路には」の「夢路」とは、「夢の中で、恋人の許へ行く道」⁴⁷のことである。「夢路」という歌語について片桐洋一氏は次のように指摘した⁴⁸。

現実に逢えない男女が、あるいは現実に逢ってもなお逢いたい男女が〈夢で逢いたい〉とよむ発想は、すでに『万葉集』からあったが、平安時代に入ると、魂が〈夢路〉をたどって相手に逢いに行くという表現が一般になった。(中略)ところで、〈夢路〉と

⁴⁷ 大野等編、同前掲注 147 書、p 1373

⁴⁸ 「夢路」に関する解釈は、片桐氏の同前掲注 34 書 (p 447) を参考したものである。

いう歌語は、『古今集』で五例よまれた。

氏の指摘を踏まえれば、すなわち「夢路」は夢で相手に逢いに行くという表現なのだという。また、「〈夢路〉という歌語は、『古今集』で五例よまれた」と氏が言っている。氏の言った五例とは、筆者が調べたところ、すなわち五二四、五七四、六五七、七六六および本節で問題にする六五八、という五例なのである⁴⁹。さらに、この五例はそれぞれに恋一、恋二、恋三、恋五に配属されており、いずれも恋歌なのである。このことから、「夢路」という歌語は恋歌とは密接な関係を持っていることが分かるであろう。

さて、「夢路」という歌語のほかに、「夢の通ひ路」、「夢の直路」といった「夢路」に関連している表現も『古今集』に認められる。たとえば、藤原敏行の次の二首である。

恋ひわびて うち寝るなかに 行きかよふ 夢の直路は うつつならなむ
(古今・恋二・五五八、藤原敏行)

住の江の 岸に寄る浪 よるさへや 夢の通ひ路 人目よくらむ
(古今・恋二・五五九、藤原敏行)

五五八番歌における「夢の直路」とは「夢の中で目的地へまっすぐに通じている道、夢では障害なく恋人のものに行きうることをいう」⁵⁰ものとされる。また、五五九番歌における「夢の通ひ路」は夢路に同じ⁵¹、すなわち「夢の中で恋しい人に会いにゆく道」⁵²という意である。ここにおいて、「夢の直路」と

⁴⁹ 六五八歌以外の四例を挙げてみる。

思ひやる境はるかになりやする迷ふ夢路に逢ふ人のなき (古今・恋一・五二四、読人知らず)

夢路にも露を置くらん夜もすがら通へる袖のひちて乾かぬ (古今・恋二・五七四、紀貫之)

限りなき思ひのままに夜も来む夢路をさへに人はとがめじ (古今・恋三・六五七、小野小町)

恋ふれどもふ夜のなきは忘草夢路にさへや生ひしげるらむ (古今・恋五・七六六、読人知らず)

⁵⁰ 中村等編、同前掲注 124 書、p 809

⁵¹ 中村等編、同前掲注 124 書、p 809

⁵² 中村等編、同前掲注 124 書、p 810

「夢の通ひ路」はいずれも「夢の中で恋しい人に逢いに行く道」として捉えられ、「夢路」から発想したものだと考えられる。

また、この二首もまた恋部に属しているものである。なお、前述したように「夢路」という歌語は、『古今集』には五例認められるが、この五例は恋歌に集中されている。つまり、『古今集』には、「夢路」という歌語も「夢路」の概念が含まれた言葉も、恋歌の歌語として使われていたと言えよう。

六五八の歌に戻るが、「足もやすめず 通へども」との二句について、松田武夫氏は「足繁く通って行ったところで」⁵³と解した。窪田空穂氏は「〈足〉は夢の中の我が足、〈も〉は軽い感歎、〈やすめず〉は、留めずで、動かすとほす意」⁵⁴と述べている。また、片桐氏は「熱心にかよって来るのだけれども」⁵⁵と指摘した。前節で見た一連の「夢で逢えた」歌から、男女主人公は夢でよく逢えたことが分かる。六五八の歌はこの一連の歌の後に詠まれたので、ここでは「(夢の中で男が) 足繁く通って行った」と解してよかろう。

つづいて、「うつつに一目 見しごとはあらず」という句についてだが、窪田氏は「〈現〉は、実際にて、前に相逢った時のこと、〈一目〉は、暫くの間の意を、夢との照応で言いかえたもの、〈見し〉は相逢った意、〈如は〉は、恋の喜びを比較して、いっているもの、即ち、如き喜びはの意」⁵⁶と解した。

また、松田氏は次のように述べている。

現実でちょっと会ったような喜びには及ばない。いくら夢の中で、何度も会っても、現実に、一目会った喜びには到底及ばない。夢での逢う瀬ははかないものだ、という気持ちを言外にこめている。

つまり、この二句は、現実でちょっと逢った喜びには及ばないという意であろう。

⁵³ 松田、同前掲注 33 書、p 276。

⁵⁴ 窪田、同前掲注 27 書、p 238。

⁵⁵ 片桐、同前掲注 24 書、p 638。

⁵⁶ 窪田、同前掲注 27 書、p 238。

まとめてみると、この歌は、夢の中の通路では、足繁く、頻繁に通うけれども、実際に一度逢った時のすばらしさには及ばない、ということである。

この歌の表現法について、松田氏は次のように指摘した⁵⁷。

この連作三首は⁵⁸、夢と現実との対比により、秘めた恋の心を表現しているものと解される。(中略) いずれも、夢と現実との比較により、夢路に通う恋心を掘り下げていい表わしている。

氏は「夢と現実との対比」という概念を提出し、さらに、その「対比」により恋の心を表現したことを指摘した。ところが、氏は「対比」の働きについて少し触れたが、この歌に関しては詳細な分析に至らなかった。

ほかに、小林世津子氏は次のように述べている⁵⁹。

夢の中でいくら逢っても、現実の世界で一目逢うこととは比べものにならないというのだ。この歌で小町は夢の儂さを痛感し、と同時に夢の頼りなさも知る。しかし、夢の儂さを実感すればする程、かなえられない恋心のやり場もなく、いっそう小町の悲しみを見る。所詮、夢は夢なのである。儂くつかみどころのない夢とは違い、実際に一目逢うことのほうが、比べようがない程に良いことは当然だろう。夢の中では、いくら逢えたときめきがあろうとも、覚めてしまえばそれっきりである。その点、現実のときめきや喜びはそのまま胸の奥底に残されるのである。

小林氏はこの歌で夢の儂さと頼りなさを表現したと指摘している。

なお、窪田氏は「恋の喜びを、暗示として、夢と現とを比較して、説明した

⁵⁷ 松田、同前掲注 33 書、p 276。

⁵⁸ 「この連作三首」は、『古今集』恋歌の六五六、六五七、六五八、三首の歌を指す。いずれも小野小町の歌である。

⁵⁹ 小林世津子、同前掲注 146 論文。

形のものである」⁶⁰と指摘した。つまり、この歌は夢と現との比較を通して、恋の喜びを表現したという。

果たして作者はこの歌では、どういう情緒を伝えたいのであろうか。

夢で何回も逢えた嬉しさはうつつで一目逢えた喜びには及ばないという歌意に沿って考えれば、作者が伝えたいのは、「相手を一目見たい、相手に逢えたい」という希求ではないか。このように考えると、作者は「夢」を提起することを通し、「うつつ」の心情を伝えようとするのが見られよう。この歌には「夢」と「うつつ」との対照関係が認められるのである。

「夢とうつつ」との対照関係を示すのは、「足もやすめず通う」と「一目見る」なのである。「足繁く」逢えたことと、「一目」逢えたこととを比べれば、誰も前者を選ぶのであろう。だが、「足繁く」逢えたのは「夢」でのことである。こういう「夢で逢える」ことは、作者にとって、「うつつ」で「一目」だけ逢えることに叶わないことである。言い換えれば、「夢」は儚いものだから、いくら夢で逢えるとしても、リアリティの「うつつ」で逢えることに及ばないものである。この歌は、前節で述べた「夢で逢えた」というレベルを超え、恋愛中の男女の更なる思念の情、逢いたい希求が一層強調されるようになったと見られよう。そして、この一層綿密な恋愛の情緒が如実に読み手に伝えられることができたのは、「夢とうつつ」との対照的な関係であることが指摘できよう。

以上のようにこの節では、「うつつで逢った」という主題を中心として、「夢とうつつ」という対照表現を見てきた。

本章の最初には「夢で逢いたい」にかかわる歌を検討したが、「夢」は儚く、空虚なものだから、何度も夢で逢えるとしても、やはり「うつつ」で逢えることとは比べられないのであろう。つまり、恋愛中の男女にとって、最も大切なのは、やはり「うつつ」で逢ったことなのである。このような心境は、作者は「夢とうつつ」という対照表現を通して描き出したのである。詳しく言えば、

⁶⁰ 窪田、同前掲注 27 書、p 239。

作者は対照表現という手法を通し、「夢」の儚さを表現すると同時に、「うつつ」のリアリティおよび「うつつで逢う」への希求を語ったということなのであろう。

第五節 夢でも逢えなくなった

さて、一旦恋情が破綻したら、うつつでも夢でも逢えなくなったのであろう。本節では、七六六の歌を通して、「夢でも逢えなくなった」という状況を検討したいのである。まず、七六六の歌を改めて挙げておこう。

⑤ 恋ふれども 逢ふ夜のなきは 忘れ草 夢路にさへや 生ひしげるらむ
(古今・恋五・七六六、読人知らず)

こんなに恋い慕っているのに夜の夢の中でさえ逢うことがないのは、夢路にまでも忘れ草が茂ってしまい、あの人が私のことを忘れたからなのだろうか。

では、つづいて、この歌に関わる先行研究を踏まえて歌意の検討に入ろう。

まずは「恋ふれども 逢ふ夜のなきは」という二句についてだが、窪田空穂氏は「〈逢ふ夜〉は、夢に逢う夜で、男の通って来る夢、〈は〉は、相逢った頃に対してのもの」⁶¹と指摘した。また、『全集』には、「夜の夢の中で逢うのである」⁶²と解釈している。つまり、この歌の「逢ふ夜」は「夢」のことを指すのである。

つづいて、「忘れ草」という句についてだが、「忘れ草」とは萱草のことを指しており、中国では「忘憂」と呼ばれていたように、憂を忘れるという意を掛けているのである⁶³。ところが、日本ではこの用語は恋に関連して詠まれることが圧倒的に多く、これに対して、日本ではどうか。

「忘れ草」という用語は早く『万葉集』に見られるのである⁶⁴。また、『和名

⁶¹ 窪田、同前掲注 27 書、p 371。

⁶² 小沢正夫等校注・訳、同前掲注 14 書の頭注 (p 293) による。

⁶³ 片桐、同前掲注 34 書、p 466。

⁶⁴ 『万葉集』には、「忘れ草」を使っている歌は次ぎの四首がある。

抄』に「萱草、一名忘憂。漢語抄云、和須礼久佐^{わすれいくさ}」とあり、憂を忘れるということ掛けて忘草と呼んだことが知られる。日本には早く『万葉集』に「忘れ草 垣もしみみに 植ゑたれど 醜の醜草 なほ恋ひにけ」というように、「来いの苦しさから逃れさせる草」、つまり「恋忘草」の意で詠まれていた⁶⁵。

ところが、平安時代に入って「忘れ草」の意が少し変わった。この点について、小町谷照彦氏は次のように述べた⁶⁶。

「忘れ草」は、平安時代になって盛んに詠まれるようになり、『古今集』では派生語を加えて六例にも達している。しかも、「忘れ貝」と同じように、憂いを忘れる意のほか、相手から忘れられる、人を忘れる意も生じてくる。

すなわち、「忘れ草」という用語は、①憂いを忘れる②相手に忘れられる③人を忘れる、との三つの意味を持っているという。①の方は元来の意味であったと見てよかろう。また、『古今集』には「忘れ草」に関連する用語はほかに、「恋忘れ草」と「人忘れ草」とあるが、この二語はそれぞれに貫之の一一一番歌と、忠岑の九一七番歌に登場した。この二例のほか、いずれも「忘れ草」として記されており、さらに恋部に配属されているのである⁶⁷。このことから、「忘れ草」という用語は恋の歌に密接に関連していることが裏付けられよ

忘れ草我が紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため（万葉・巻三・三三四、帥大伴卿）

忘れ草我が下紐に着けたれど醜の醜草言にしありけり（万葉・巻四・七二七、大伴家持）

忘れ草我が紐に付く時となく思ひ渡れば生けりともなし（万葉・巻十二・三〇六〇、作者未詳）

忘れ草垣もしみみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけ（万葉・巻十二・三〇六二、作者未詳）

⁶⁵ 「忘れ草」に関する解釈は片桐、同前掲注 34 書によるものである。

⁶⁶ 小町谷、同前掲注 7 書、p 132。

⁶⁷ 『古今集』における「忘れ草」という歌語を使った歌を挙げる。

道知らば摘みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草（古今・墨滅歌・一一一一、紀貫之）

忘れ草種とらましを逢ふことのいとかくかたきものと知りせば（古今・恋五・七六五、読人知らず）

恋ふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひしげらむ（古今・恋五・七六六、読人知らず）

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜は置かなむ（古今・恋五・八〇一、源宗干）

忘草なにをか種と思ひしはつれなき人の心なりけり（古今・恋五・八〇二、素性法師）

すみよしと海人は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふと言ふなり（古今・雑上・九一七、壬生忠岑）

う。

以上の解釈を踏まえて、七六六の歌を振り返って見てみれば、この歌における「忘れ草」とは、人に忘れられることである。

つづいて、第四句の「夢路にさへや」を見てみよう。この句について、窪田氏は「〈夢路〉は、夢の通って来る路、〈さへ〉は、までも」⁶⁸と述べている。また、松田武夫氏は「〈夢路〉は〈夢の通ひ路〉と同じ歌語で、夢の中で愛する男女が往き来する意をこめた」⁶⁹と指摘している。「夢路」という歌語についてだが、六五八番歌における「夢路」と同様に、「夢の中で、恋人の許へ行く道」という意として用いられていると見られよう。

さて、「生ひしげるらむ」という句についてだが、松田氏は「忘れ草が生い繁るのであるが、この場合、忘れるのは、相手がこちらを、と解してよい」⁷⁰と指摘しており、さらに、〈おひ繁る〉は〈草〉〈路〉と縁語関係があるとしている。竹岡正夫氏は「あの人に私を忘れさせる忘れ草が、起きている間の道はもとよりそうだが、夢の中の道にまで生えているのであろうか、という気持ちである」⁷¹と述べている。つまり、この歌において、作者は「逢ふ夜のなき」の原因は、忘れ草が生い繁ることにあると作者が口実としているのである。ここでは、「忘れ草」は、「人を忘れる」のではなく、「相手に忘れられた」という意と捉えなければならない。

以上の語釈をまとめれば、この歌は、「これほどまで恋い慕っているのだけれども、逢う夜がないのは、私を忘れるという名を持つ忘れ草がその夢の通路にまで生い茂っているせいだろうか」⁷²という意となろう。

この歌は言うまでもなく「夢」の歌であり、夢の中でさえ忘れられた作者の悲哀を語る歌と見られる。この点は「夢路にさへや」という「さえ」の使用からも分かるのであろう。

しかし一方、この歌の重点は決して「夢」になく、むしろ「うつつ」にある

⁶⁸ 窪田、同前掲注 27 書、p 372。

⁶⁹ 松田、同前掲注 33 書、p 423。

⁷⁰ 松田、同前掲注 33 書、p 423。

⁷¹ 竹岡、同前掲注 35 書、p 1530。

⁷² 片桐、同前掲注 24 書、p 864。

のである。なぜなら、「忘れ草 夢路にさへや 生ひしげるらむ」における「さへや」一語を通して、この忘れ草は決して「夢路」で生い繁っているだけではなく、「うつつ」で繁く生えている上に、「夢路」でさえ生い繁っていると語られているからである。

この歌に関して、田中常正氏は「夢路に忘れ草が生えることを空想している歌を構成していて、現実投影の夢の歌である」⁷³と指摘している。氏はこの歌を「現実投影夢の歌」として見ている。ここにおいて、氏の言った「現実投影」という点は、「現」という時間点を提起しているが、この歌は「夢の歌」であるとしているように、氏の論証の重点はやはり「夢」という点にあらう。

しかし、なぜ「夢路」でさえ忘れ草が生えているのか。それは「うつつ」にはすっかり忘れられたからではないか。ここで、「忘れ草 夢路にさへや 生ひしげるらむ」と詠まれたのは、単に「夢」の状況を語るだけではなく、「うつつ」では早くも忘れ身になったという苦しい状況を読者に伝えようとしているのであらう。このように考えると、この歌の重点はやはり「夢」の状況を訴えることにあらず、「うつつ」での切なさを訴えることにあると見てよかろう。

一方、「うつつ」で逢えなくて相手に忘れられたことは、悲しいことに違いないが、「夢」でさえ逢えないのは、一層辛いことであらう。さらに、「夢」でさえ逢えないことについて、「うつつ」に戻った作者は如何なる心情があるのであらうか。それは切なさが増さるに違いないであらう。ここにおいて、「うつつ→ゆめ→うつつ」という三段構造が見られる。そのなか、「夢」は「うつつ」の状況を反映しながらも、現実にいる作者の寂しい心情を一層増幅させるものと見られるのである。

さらに、「うつつ→夢→うつつ」という三段構造には二回の「夢とうつつ」との対照表現が認められる。作者はこの二回の「夢とうつつ」との対照表現を通し、「夢」でさえ逢えない、という現実に対する作者の絶望感を伝えていると見られよう。このことから、「夢とうつつ」という対照表現は、この歌においては重要な働きをしていると認められるのである。

⁷³ 田中、同前掲注 39 書、p 293。

また、本章の第一節の「いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る」（五五四、小野小町）で述べたように、恋愛中の男女は、「うつつ」で逢えなくても、せめて「夢」で逢いたい。また、第三節の「思ひつつ寝ればや人の見えつらん」（五五二、小野小町）で述べたように、相手を思いつつ、夢に入り、夢で相手を見たのである。しかし、今の問題の歌は「夢路にさへや 生ひしげるらむ」とあるように、いくら主人公が恋焦がれているとしても、夢でさえ逢えない。ここにおいて、第一節から第五節までは「夢で逢いたい」→「夢でさえ逢えない」→「夢で逢えた」→「うつつで逢えた」→「夢でも逢えなくなった」という順で排列されていることが分かるだろう。この点もまた『古今集』の歌は時間的な推移によって排列されたことが改めて確認できよう。

さて、七六六に続けて「夢でも逢えなくなった」という嘆きを詠む歌として七六七の歌を挙げることができる。

夢にだに 逢ふこと難く なりゆくは 我やいを寝ぬ 人や忘るる
(古今・恋五・七六七、読人知らず)

この歌は、夢で逢うことが難しくなる理由を問う歌である。ここでは、作者は夢で逢えない理由を、「我やいを寝ぬ」「人や忘るる」に託して語るのである。すなわち、夢で逢えない理由の一つは、私が恋の苦しみで寝られないからであり、もう一つは、相手が自分を忘れていたからなのである。

本章の第三節に述べたように、俗信においては、夢に現れるのは相手が自分のことを恋しているからであることとして捉えられる。これに対して、この歌では、夢であの人と逢えないと語られているが、作者はその理由の一つをあの人自身が自分のことを忘れてしまったことに求めているのである。

この歌では、「や」という疑問の係助詞が二回用いられ、作者の強い問いかけを示しているのである。この強い問いかけはむしろ作者の苦渋の心境から発したものだと考えられよう。

また、この歌の上の三句では、「夢にだに 逢ふこと難く なりゆくは」とあるが、「夢」のことが提起されている。これに対して、下の二句は「我やい

を寝ぬ 人や忘るる」とあって、「夢」で逢えなくなった理由が説明されると同時に、夜寝られない状況と相手に忘れられた状況が提起された。この二つの状況は言うまでもなく作者を苦しめる現況であり、「うつつ」の範疇に属しているのである。したがって、ここでは、「夢」と「うつつ」とは同時に示されていることが認められる。

この歌において作者が、「夢」でも逢えなくなったという心情を提起する同時に、「うつつ」で逢えなくなったことも説明した。ただし、同じく逢えなくなった状態にあっても、「夢で逢えなくなった」心情と「うつつで逢えなくなった」心情とは一様ではない。なぜなら、二人が別れたら、「うつつ」で逢えなくなるのは、当然なことである。しかし、離れていった人を恋しく思っている、「夢」でも逢えなくなったのは、何故であろうか。恋はすでに終焉になったが、自分はまだ相手を思っている。しかし、相手は未練もなく、もう自分の事を忘れてしまった。そのために「夢でも逢えなくなった」ことになろう。そして、「うつつで逢えなくなった」ことより、「夢で逢えなくなった」ことの辛さは一層強いものであろう。ここにおいて、「夢」と「うつつ」とは対照関係をなして、相手の冷たさと、作者の悲しさを物語っていよう。この点は七六六の歌に通じていよう。

本節では「夢でも逢えなくなった」という主題を中心として、「夢とうつつ」という対照表現を探究した。

恋情が終わると、逢えなくなるのが自然なことであるが、何故作者は、夢で逢えなくなったことを強調するのであろうか。それはやはり恋に対しては未練が残るのであろう。それに、「夢でも逢えなくなった」ということから、二人の恋情の冷めたこと、また相手が逢いに来てくれないという冷淡さが示されていよう。にもかかわらず、この冷めていく恋に対しては、作者はやはり未練があり、相手を忘れない。ここにおいて、「うつつと夢」という対照表現を通して、主人公の恋愛中での切なさおよび無力感が伝えられていよう。

第六節 まとめ

本章は「夢とうつつ」に関する対照表現から、『古今集』恋歌を分析してきた。

『古今集』恋歌における人々は、現実生活に実現できないことを、夢に託して、夢を通して実現させたいのであった。この心情は現代の恋人達と同様である。さらに、『古今集』の恋歌では、「夢とうつつ」という対照表現が認められ、この対照表現によって、『古今集』時代の人々が夢への頼りが示唆されていると見られる。そして、そのような「頼り」の心情は、恋の進行過程により少しずつ変わっていくのである。すなわち、「夢で逢いたい」→「夢でさえ逢えない」→「夢で逢えた」→「うつつで逢えた」→「夢で逢えなくなった」というように変化していくのである。

「夢で逢いたい」を詠む歌では、「夢とうつつ」という対照を通して、うつつで逢いたい、うつつ逢えないから、せめて夢で逢いたいという気持ちが伝えられたのである。

「夢でさえ逢えない」を主題にする歌では、「夢とうつつ」という対照を通して、うつつで逢えないが、夢でも逢えない切なさが表現されている。

「夢で逢えた」を描いた歌では、「夢とうつつ」という対照を通して、夢で逢えたが、うつつでの片恋の気持ちが語られている。

「うつつで逢えた」を主題にする歌では、「夢とうつつ」という対照を通して、夢の儚さとうつつのリアリティが読まれている。

「夢で逢えなくなった」という主題では、「夢とうつつ」という対照を通して、うつつで逢えなくなった切なさと、夢さえ逢えなくなった悲しみが強調されている。

以上の五つの主題の歌の分析を通し、夢は、現実には逢えない時、それを通して逢瀬を実現させたい重要な時間帯と見るべきであるだけでなく、恋人の心情を如実に反映しうるものだと認められる。その心情は、「うつつ」と「夢」との対照的關係を通し、一層明白になる。このことから、「うつつと夢」との対照的關係は、『古今集』恋歌を読む際に看過してはならぬ視点なのだといえよう。